

「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい(使徒 1:4)」と使徒たちは命じられた。復活のイエスは40日にわたって教え(1:3)、生前のように食事も共にした(1:4)。

マルコとマタイ福音書では「ガリラヤで待て」だが、ルカ福音書と使徒言行録では「エルサレムで待て」という命令だ。「ガリラヤへの帰郷」のことは月報「いき」4月号で触れた。

使徒にしてみればエルサレムとは、神殿を擁する聖都であるより、十字架での蹉跎に苛まれる呪わしい街なのだ。

心に傷を負ったガリラヤ出身の素朴な若者に、「エルサレムで待て」は酷な命令ではないか。この呪わしい街で「父の約束されたもの(1:4)」、掴みどころのない「聖霊(1:5,8)」を待つ。こりゃ不安だろう。

自宅での自粛を促すTV、プロが教える簡単レシピといった料理番組で、お好み焼きを作っていた。その料理人は、フライパン上の刻みキャベツに焼けた衣をそっと乗せ、そのまま待つように厳命し、素人は不安からすぐ手を出してしまう、とつぶやいた。キャベツの水分蒸発を衣で閉じ込め、しんなりさせるらしい。確かに、私だったら待ってられずに具材を動かし、大切な水分を逃してしまう。

「父の約束されたものを待ちなさい(1:4)」と命じられても、元田舎漁師たちだけで、馴染のない都会で「待つ」のはものすごく不安。

じっと待っていると、ネガティブに膨らむ不安から余計な行動に走り、状況を濁らせて肝心なものを逃してしまう。そんな注意点を、お好み焼きの作り方から学んだ。

「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのはこの時ですか(1:6)」と使徒は尋ねた。彼らに思いつくことは過去の秩序快復がせいぜいで、イエスはこれを否とし、使徒らの想像範囲を遙かに凌駕する聖霊による未来を示した(1:7~8)。危機の中で人々が願うことも、たいていは過去の安寧。

使徒たちは、生前のイエスと寝食を共にし、復活のイエスから40日間も学んでいるのに(1:3)、「国を建て直す」という古い秩序から抜け出していない。だが聖霊は、そのような無理解で不十分な使徒を、無理解なまま、不十分なまま、想像を超える神の御計画の中へ押し出していく(1:8)。

私たちも同じではないのか。「脆い土の器」である私自身のまま、くすしき御計画のために用いられる(Ⅱコリント 4:7)。

敬虔な生き方とは、己に働く聖霊が分かっていることではない。神の御心に納得して従うことではない。

「父の約束されたもの(聖霊)を待ちなさい(使徒 1:4)」と言われ、不安なまま、納得できないまま、それでも「待つ」こと。いくら帆をあげても、風(聖霊)が吹かなければ私たちの舟は動かないのだから。

「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が、神とお前たちの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ(イザヤ 59:1~2)」。

人間は待つだけの不安から、神との通路を断ち、自ら悪と罪に陥る。

私たちの悪が神の御手を遠ざけている。私たちの罪が神の声を乱している。しかし悪人であっても、罪人であっても、この私たちのまま、聖霊は私たちを動かすだろう。だからその時を「待つ(使徒 1:4)」。

聖霊とは、私たちに於いて働かれる神の具体性。キリストの体として私たちを動かす未知なる力。使徒たちが激しく聖霊を受ける(2:2~3)以前から、聖霊は、静かに、淡々と、確実に彼らを導いていた。



《おまけのひとつ》

いつも どこでも 不十分な私のまま聖霊に吹かれている 敬虔とは そんな己を然りとすること
風速計で捉えられる聖霊はほんの一部に過ぎない 今は枝先の若芽をさやさや動かすくらいで充分